

報 告

2011年災害ボランティア先遣チーム調査報告

坂本雅俊^{1)*}, 林俊介²⁾, 廣田和仁³⁾
勝本健太⁴⁾

(¹⁾長崎国際大学 人間社会学部 社会福祉学科、²⁾長崎国際大学 健康管理学部 健康栄養学科、

³⁾長崎国際大学 薬学部 薬学科、⁴⁾長崎国際大学 学生課、*連絡対応著者)

Disaster Volunteer Report by the Advance Researchers

Masatoshi SAKAMOTO^{1)*}, Shunsuke HAYASHI²⁾, Kazuhito HIROTA³⁾
and Kenta KATSUMOTO⁴⁾

(¹⁾Dept. of Social Work, Faculty of Human and Social Studies, Nagasaki International University, ²⁾Dept. of Health and Nutrition, Faculty of Health Management, Nagasaki International University, ³⁾Dept. of Pharmacy, Faculty of Pharmaceutical Science, Nagasaki International University, ⁴⁾Student Affairs Division, Nagasaki International University,

*Corresponding author)

本学に長崎国際大学ボランティアセンター(以下、センターとする)が2011年4月に設置され、災害ボランティアの活動準備、実施、報告、その他教育活動を開始している。3学部選出のセンター運営委員会委員を中心に予算執行に伴う活動を行う。

2011年3月11日の東日本大震災による被災地でのボランティア活動を行うべく、同年8月21(日)～24(木)にかけて、ボランティア先遣チーム(以下、先遣チーム)として、坂本雅俊(社会福祉学科)、林俊介(健康栄養学科)、廣田和仁(薬学科)、勝本健太が岩手県盛岡市～山田町の被災地及び学生ボランティアの支援体制をいち早く構築されていた岩手県立大学(岩手郡滝沢村)を訪問し、調査を行った。

山田町(やまだまち)を災害ボランティア先として選んだ理由は、本学在学生の出身地である岩手町の、岩手町社会福祉協議会に依頼し山田町の紹介を得たからである。

先遣チームの目的は次の4つである。

① 被災地に被害の状況を尋ね、復旧・復興の

状況を把握し、我々にできる支援の在り方を検討する素材を収集する。

② 被災地での支援のニーズと災害ボランティア受入れ体制について、聞き取り調査を行う。

③ 現地に赴いて行う支援と、現地に行かなくてもできる支援の両面から、本学で実施可能なボランティア活動について調査を行う。

④ 得られた情報を、本学の学生・教職員に伝達する。

盛岡市内と山田町などへの訪問行程の概要と



学内報告会の日程は次のとおりである。

8/21(日) 岩手県盛岡市へ移動。盛岡市災害支援センター視察、SAVEIWATE（一般社団法人、東日本大震災被災地支援チーム）視察、岩手県産品販売所（ララ岩手）視察

8/22(月) 岩手町社会福祉協議会表敬、かわいキャンプ視察、山田町社会福祉協議会ボランティアセンター視察、山田町及び大槌町視察山田町ボランティアセンター宿泊

8/23(火) 山田町ボランティアセンターでのサロン活動に帯同、山田町役場表敬、木村水産訪問、道の駅山田訪問

8/24(水) 盛岡市社会福祉協議会表敬、岩手県立大学表敬訪問

9/28(水) 本学1101教室において、先遣チーム報告会を実施。

以下にその詳細を示す。

8/21(日) 午前8:00福岡空港から東京・羽田空港、東北新幹線はやてにて、東京11:28発、盛岡駅14:16着、その当日より岩手県内を移動するためにレンタカーを契約し、盛岡市内の新聞社や報道機関などで情報収集を試みたが、当日実施されていた大槌町長選挙や24時間テレビなどの影響で、十分な情報収集が出来なかった。そこで、県産品の購入による後方支援が出来ないかという視点から、県農林会館に併設されている「特産品プラザららいわて」というショッピングセンターを訪問した。その際、特産品コーナーで「岩手山田いか徳利木村商店」の販売員から、この店は山田町では有名な特産品で、「山



田町の復興は自分達が率先してやらねばならない、助けに慣れてしまわないように」と山田町で事業再開に取り組んでいるから訪ねてみてはどうかと紹介を受けた。その商店では、学内で紹介するために商品の写真を数十枚撮影させてもらった。

さらに、ララ岩手の職員から、盛岡市内の「SAVEIWATE」、「岩手県盛岡市もりおか復興支援センター」の情報を入手しこちらを訪問することとした。TVI テレビ岩手の向かいにある、閉鎖された銀行店舗をそのまま活用した「もりおか復興支援センター（2012年3月まで開設）へ訪問。「情報交友コーナー」など被災後の資金や生活支援相談が受け付けられる機関で、盛岡市および沿海部の被災状況・ボランティア活動状況について情報収集を行った。また、支援物資が取りそろえられている「番屋」の情報など、細かい必需品など被災者のニーズに応えようとしていると伺う。その際に紹介された復興支援の物資の仕分けを精力的に行っているという「番屋」を訪問し、物資が重複して置場に困っていることや、保存しているうちに期限切れを迎える品、使用された形跡のある品の抜き取り廃棄など、全国から寄せられる支援物資への感謝と困惑の複雑な現実のあることを聞いた。

(写真下／復興支援センター)

翌8/22日(月) 8:30岩手駅前のホテルを出発、気温19℃、最初の目的地の岩手町（いわてまち）社会福祉協議会までレンタカーで約1時



間の行程である。北上高地を盛岡市内から北上し、標識には青森十和田湖の標識案内も見える。昨日は飛び込みの訪問つきであったが、ここからは事前に面会を予約している。岩手町社協局長の藤村文男氏からは、①内陸部の岩手町ではほとんど大きな被災はなかった、②県内を8ブロックに分け、岩手町は葛巻町、滝沢村など4市町村を1グループとして山田町を支援すべく社協で割当てを行い、盛岡市や宮古市を支援担当するなどして支援の偏りを避けた。盛岡市から宮古市までの国道沿いに、現在廃校となった校舎をボランティア活動の拠点として盛岡市社会福祉協議会が開設したとの情報を得て、市社協の担当者を訪ねるよう紹介された。

一年前に廃校となっていた旧宮古高校川井校校舎に開設された「かわいキャンプ」へ14:00に到着、千葉英亨（ひでゆき）課長（盛岡市社協）に面会し、「かわいキャンプ」の現状について伺った。それによると、7/5より同キャ



(写真上/岩手町社協内)

ンプを開設し、川井から大槌町まで片道約1時間のボランティアのための送迎移動バスを走らせている。「かわいキャンブ」は、宿泊については、男女別の教室を用いた雑魚寝ではあるものの50名ずつ100名が可能であり、簡易シャワーやトイレも使用でき、調理室を活用した自炊ができ、宿泊費は無料であるため、学生や全国からのボランティアが活用している。宿泊が可能

(写真/かわいキャンブ)



なときは家族単位での宿泊としての活用も可能であるということであった。

沿海部の店舗の営業状況が不明であったため、あいていたコンビニエンスストアで飲料水・パンなどを購入。

16:00山田町へ到着。沿岸部に近付くと次第に破壊された街や、傾いた建物が見え始め、未だ灯っていない交差点の信号機と手信号で合図する警官など、尋常ではない風景が広がり始め





た、26,345km²、約7,000世帯2万人の町、シンボルは鳥はうみねこ、花はハマナスである、ただ、借景に観える山川草木と海はこの日は小雨混じりながらも穏やかな様子。

災害ボランティアセンターが設置されているB & G山田海洋センターは体育館と武道館の2館がつながっており、更に山の上に隣接して船越家族旅行村が観える。

ボランティアセンターの阿部氏を表敬訪問し、お見舞いを申し上げますとともに敬意を表した。現状は海上の漂流物の撤去、水路の泥出し、河川の清掃、流された家の跡地から釘やガラス片の手作業での除去、遺品や思い出の品の拾い出し、幼児と母を集めて保育を再開、そして写真の洗浄の活動を被災者の要望に応じてボランティアを派遣しており、8/22から避難仮設住宅の被災者へのサロン活動等を開始したところであるということであった。

その後、山田町や隣接する大槌町、宮古市の交通インフラの把握やいざという時の避難場所および経路、医療機関の有無、店舗の営業状況を調査した。ボランティアセンター近くの環境は、ラジオや携帯電話は通じるが、ワンセグやスマートフォンはあまり受信できなかった。電源はあるものの携帯等の充電機能はない。昼食(300円)、夕食(500円)は弁当注文ができ、必要物資はボランティア活動の帰りに地元で再開しているスーパーや道の駅に立ち寄って購入することもできる。シャワーもあるが、地元の温

泉銭湯も利用できる。22:00一斉消灯、就寝。

(写真下/山田町災害ボランティアセンター)

8/23(火) ボランティア活動の一日は、6:00ボランティアセンターでの宿泊者、全員が一斉に起床。6:30朝食、7:00名前と希望するボランティア活動を登録(所持している資格などを記入)、8:30「マッチング」という作業が行われ、当日に同行するグループとボランティア派遣先が発表される。その後出発、12:00昼





食時にボランティアセンターへ戻り、午前の活動報告と昼食をとる、ボランティア予定が午前だけの者は終了報告を行う。13：00午後の活動を再開、15：30頃ボランティア終了、ボランティアセンターへ戻り、活動報告、解散となる。

この日、先遣チームは、午後から商工会へ訪問予定もあるため、午前中はサロン活動に帯同させてもらうよう依頼した。

サロン活動は、「お茶っこサロン」と呼ばれ、仮設住宅への入居が地区ごとではなく、抽選で決定されたため、従来あった居住地域ごとの近所のつながりが希薄になり、孤独死の発生など最悪の事態が懸念されていた。そこで、仮設住宅へ引っ越したあとの新しい御近所づきあいを築くボランティア活動がこのサロンである。具体的には、仮設住宅の集会所で、お茶を飲みながら洗浄した写真をみてもらいつつお話を伺うことを計画的に行うことである。仮設住宅への引きこもりを避けつつ気持ちを語れる場づくり、隣の人との顔見知りの関係づくりなどが実践されていた。（写真下／朝のマッチング風景）

本学から持参したカステラを茶菓として提供した。これから本格化するサロン活動は社会福祉協議会職員やボランティア参加者も手探り状態で始めていた。

後発に続く学生の災害ボランティアの行程と一日の流れ、そして、安全に男女学生共に派遣できる環境を確認した。





8/23午後、山田町役場、水産商工課を訪問し、復興支援に適した特産品を調べ、地元業者と山田町観光協会（道の駅やまだ）を訪問。水産商工課へ表敬訪問とお見舞いの意を伝えた。同課では、すでに大手デパートなどとの海産物の特産品販路の交渉などが進んでおり、同じく海産物の豊富な佐世保への仲介は軌道に乗りにくいように見えたが、大学内の教職員へのカタログ販売は「購入することによる復興支援」として持ち帰り紹介したところである。

（写真下／JR 山田駅前跡、ホームの線路も流され跡形もない。写真右上／バス停があり、難を逃れた高齢者と出会った）

水産商工課職員の紹介にて、復興再開したばかりの津波で流された跡地に建てられた食堂「初音」で昼食をとった。食堂では、知人の犠牲者のことや、生きていた「再会」を確認し合う客同士の会話も聞こえてきた。当然ながら笑顔で話す者はだれもない。

（写真／再開したばかりの食堂、「初音」）



その後、車で15分程の創業100年以上の木村

商店を訪ねた。工場が流されたため、4月末に自宅前に設けた小屋で製造を再開し、従業員数名が「いか徳利」づくりを行っていた。数名の従業員を亡くした木村社長（66）は、九州出身のもっこすだったという夫と共に販路を拡大した、「三陸の美味しい魚介類を都内や福岡のデパートで販売する予定、支援だけを頼りにしては地元はだめになる」と話す。自宅居間に招かれ、佐世保の話などをするなかで、「支援は必要だけど、それに頼ってばかりではだめ、誇りをもって生きる、自立する努力をはじめなきゃならない」という話は被災者の複雑な思いの一片として我々は重く受け止めた。

その夕方、「道の駅やまだ」を訪問し、仮事務所を併設している山田町観光協会を表敬訪問し、「鯨と海の科学館」館長の湊さんらへお見舞いの意を伝えた。駐車場には他の様々なボランティアや医療、自衛隊等の車両がみられ、たくさんの支援団体が訪れていることがわかる。鯨と海の科学館は震災で被災したが、クジラの標本は被害がなかったそうであった。

宮古市街経由で盛岡市へ移動。



8/24(水)9:00、面会予約していた盛岡市社会福祉協議会を表敬訪問し、岩館事務局長と藤澤主事にお見舞いと活動への敬意を伝えた。藤澤さんとは一昨日かわいキャンプの手伝いで来ていたところに偶然お会いしており、市社協支援活動の粗方の状況はつかんでいた。盛岡市内と山田町など被害の大きかった沿岸部とが100近くあることから、中間のかわいキャンプを設

営し全国から入ってくるボランティア活動の後方支援を中心に活動している。担当割で、三重県、北海道、静岡県が職場からの派遣として被災地の支援を行っている。方法は、各県道の職員がローテーションを組み被災地入りし、宿泊ホテルを拠点にボランティアセンターへ出勤する形で、泥かきや瓦礫撤去などの力仕事から、被災者への生活費の相談（生活福祉資金）や被災者や被災で家族などを亡くした遺族のこころの相談、子供の談話室など多様な取組を山田町災害ボランティアセンター職員を中心として支援活動を展開している。また、野田村は壊滅的な被災だったが不明者は0であったこと、三沢基地、米軍からの支援があったこと、いわて GINGA-NET の学生ボランティアのこと、お茶っ子サロンは大船渡町などではボランティアが始まっていることなどの情報を得た。「被災した関係の子供たちはもちろん地元の人達も長崎など遠いところから学生が来ると喜ぶと思います」、「行政や社協職員に言い難いことでも被災された方は学生さんなら、問題は解決しなくても、言える。被災者と話す場面があれば、九州のことは遠くてあまり知らないで、話したいという興味があると思う」、そして、「学生ボランティアで来るのならば、支援をしに行くというより、岩手の方から学ばせてもらうという事前教育を受けて来られると交流が続けられると思う」と藤澤さんは結んだ。

(写真/盛岡市社会福祉協議会)



10:00、盛岡市社協を後にし、次に面会予約をしている岩手県立大学へ向かう。副学長で社会学部教授の佐々木民夫氏、副学長兼事務局長の瀬川純氏、そして企画室総務財務課長の山崎隆氏と面談。深いお見舞いをお伝えし、被害情報をお伺いした。宮古在住の学生が自宅近くで亡くなっていたことを知った。入学式も挙行が中止され、校舎の一部は完全復旧していない状況であった。災害ボランティアに関しては、学内の一室に『岩手県立大学災害復興支援センター』を設置し、防塵マスク、湿布、冷却シート、カットパンなど簡単な応急処置用のセット「復興支援セット」、を始め、メガホン、扇風機10数台、寄贈された新品のパソコン数十台が、災害ボランティアに出かける学生に貸与や支給するなどの準備がされていた。

(写真は岩手県立大学内、備品類、救急セット等)

「大学組織として直接的にボランティア活動



を組織するのではなく、数名の教員が独自に NPO であるいわて GINGA-NET を組織し、ボランティア学生と被災地へ出かけており、それをサポートする仕組みをとっている、通常の大学の講義に学生を集中させることに努めており、ボランティア活動にいくために公欠扱いはしていない。ボランティア活動を単位認定はしていない。」という状況を伺った。学生の心のケアと共に、通常の大学運営を実行していくことが第一であることが理解できた。その後盛岡駅より帰路に就いた。

9/28(水)12:15~13:00、先遣チーム報告会を実施した。長崎国際大学ボランティアセンターの主催で学生と教職員を対象として、パワーポイント、ビデオ映像等を用いて、先遣チームの活動の様子と、現地の様子やボランティアニーズ等について詳しく報告した。特に「災害ボランティア学生募集」へ繋げるため、費用、安全情報、心がけなど大学のフォローアップについ

ても同時に提言も申し添えた。参加者は潮谷学長（当時）を始め教職員を含め、約100名が出席した。山田町社協災害ボランティアセンターに対しても、この報告会実施の件と、今後、本学学生と教職員が災害ボランティアで訪問させていただきたい旨を報告・連絡を行った。

この報告会を受けて、2011年10月14日（金）～17日（月）にかけて、山田町災害ボランティアセンターへ、脇野幸太郎（社会福祉学科）と勝本健太、国際観光学科と社会福祉学科の学生8名が出向き、ボランティアを行った。

山田町ボランティアセンターからは、大学別では一番遠いところから来られたボランティア、と評されたが、本学学生が実際に現地に赴くことは、移動時間（約12時間）、宿泊交通費（約5万円／1名）の面で難しい側面がある。ボランティアは自己責任、自発性、無償性などが原則であるが、本学のサポートがあれば、それらのハードルは下がる。岩手県立大学では災害ボランティア活動を単位認定は行っていなかった。災害ボランティアだけを単位認定するのは、本学でも検討したものの、講義内容の確保を考えると、講義回数に読み替えることそのものが困難であった。そこで本学では平成24年度より、全学共通科目「ボランティア論」の講義（10回）＋ボランティア実習という形で災害ボランティアだけでなく、多様なボランティア活動を含めて単位認定化を開始した。

今回の派遣を通しての小括を述べる。

沿岸部の被害の大きさについては、報道等で、派遣チーム全員が承知していたものの、実際に自らの五感を通して、沿岸部の被害の甚大さと、復興の遅れを改めて認識させられた。

現地でのボランティアニーズは充分にあり、今後も長期的な活動が求められている。

本学から山田町に学生ボランティアを派遣するとき、距離が遠いことからその旅費経費が問題となる。学生ボランティアに対してボランティアセンターからの補助が必要である。経費には、

食費やその他の手当も必要であろう。また、装備は大学備品（靴、帽子、手袋、まくらなど）が数名分あるものの、その充実も必要である。

さて、山田町のインフラ自体は復旧している。電気・水道・電話は利用可能、JRは運休中だが、バスは運行しており、スーパーで買物も出来るため、衣食住についてはおおむね充足してきており、現地調達も可能である。ただ、現地での移手段の確保や、行動範囲を広げるために、レンタカーの活用も必要と考える。

災害ボランティアの役割は、発災当初の力仕事から、人を支える役割の方にシフトしつつある。

具体的には、仮設住宅には入居できたものの、今までのコミュニティから切り離された生活を送ることで孤独死などの発生が懸念された通りみられており、「お茶っサロン」や子供と母の談話ルームなどスタッフ・ボランティアが出向いていく積極的な介入が必要と思われた。

このような活動に対して、本学でボランティアを希望する学生が（藤澤氏が話されたように）支援できる状況はあると考えられる。ただ、そのような活動を実施するためには、地元との信頼関係の構築が必須である。宿泊させていただいた山田町ボランティアセンターには、多くのボランティア団体が反復継続的に来訪している。そうしたひとつとして信頼関係を構築するには細々とでも継続して訪ねていくことで、本学（の名前）が山田町の人々に覚えてもらえる顔見知りのような信頼関係づくりをすすめていくことが望ましい。

岩手県立大学では、発災直後からボランティアセンターが立ち上がり、教員主導のいわてGINGA-NETと協調して学内での支援体制などを整備していったということであった。大学のシステムを活用して学生ボランティアを支援する体制や、ボランティアを希望する学生のボランティア保険料を大学が全額負担しているなどの状況は、早速本学でも取り入れたところである。

先遣チームの提案で締め括る。①災害ボランティアへ出かけたい学生には、大学ボランティアセンターが被災地の安全性を確認の上、交通費の補助、ボランティア保険料を検討するのが望ましい。②被災地へ出かけなくても、本学にいてできる後方支援を学生とともに捜し実行していくことも可能である。東日本大震災では被災地から泥などで汚れた写真を送付してもらい洗浄し、メッセージを添えて送り返す、特産品を積極的に購入し地元産業の復興へ声かけする、

例えば開国際などで募金活動を行い、メッセージを添えて送る等がある。

最後に、被災地を巡回し、多くの皆さまから貴重なお話を伺うことができた。改めて、お見舞いと感謝を申し上げたい。本学学生が災害ボランティア活動を体験することは、作業そのものにも意義があるが、そこでいろいろな人と出会い見聞きし会話することそのものであり、学生の成長につながる「できごと」を作るきっかけとなることを確認できた。